

# 在外研修成果報告

## —ドイツと北欧をめぐる—

1975年9月11日から11月10日まで、文部省在外研修生として、ヨーロッパ7カ国をめぐる。ドイツ連邦共和国で1カ月過ぎたほかは数日間づつの短期滞在である。

ドイツ連邦共和国では、ハイデルベルク大学（ミロイチチ教授）、ハンブルク大学（フライ教授）、ケルン大学（リュニク教授）、フランクフルト考古学研究所ローマ＝ゲルマン委員会（シューベルト博士）で、学史、型式学、土器・石斧・石鏃、埋納遺物などについて学び、文献渉猟にはげんだ。また各地の博物館では、展示方法を学ぶ点も多かった。ケルンで開催中の、「古い世界の新しい姿」展は、1950年来の重要発見遺物を網羅すると同時に、現代ドイツ考古学の研究方法を解説し、埋蔵文化財破壊の危機をうったえることにも意を尽しており、その姿勢に感銘をうけた。フライ教授のすすめで、ビュルツブルクの考古学協会大会におもむくと、出席者名簿に名があがっており、懇親会での委員長挨拶の中でも紹介をうけるなど、予期せぬこともあり、ヘルベルト＝キューン博士ほか多数の考古学者と知りあうことができた。

ドイツ民主共和国では、ベルリンのD. D. R. 科学アカデミー（キッタ博士）、ハツレ博物館（マティアス氏）、マルチン＝ホルター大学（シュレツェ教授）で勉強した。中石器時代土器として日本でも知られている灯心草土器が新石器時代後半にぞくすること、青銅器時代のロクロ土器なるものが、じつは粘土帯積み上げ法によっていることを確め、14C年代ほか多くの問題について知識・意見を交換した。

オーストリアでは、ウィーン大学（ピチオニ教授）、自然史博物館（メリヒャー博士）をたずね、ハルシュタット遺跡の岩塩坑の壁をなめ、ザルツブルクのモーツアルト生家を訪れて、しばし感慨にふけた。

デンマークでは、1970年に来所したB. クリステンセン博士のお世話になり、国立博物館では、展示方法を記録したほか、トムセンの『北欧古代学入門』をめぐる疑問を解決し、彼の墓に詣でた。またライレの実験考古学農場を訪問した。スウェーデンでは、遠東博物館（ヴィルギン博士）の展示方法を記録し、モンテリウスの初期の文献を受贈し、墓参した。オランダでは、グローニンゲンの生物考古学研究所（ウオーターボルク教授）を訪問した。イギリスでは、新石器時代を定義した原典、ラボックの『先史時代』の初版をみることができた。また学史に詳しいダニエル教授（ケンブリッジ大学）にトムセン英訳に訳者の付加が多いことを報告した。

今回の渡欧は、ハンブルクで高価なコーラを飲まされるなど苦い経験もあったが、ヨーロッパの風土・人間に直接せつすることができた喜びは、学問的収穫にも増して大きい。

なお、西ベルリンのドイツ考古学研究所、ハイデルベルク大学、ケルン大学、マインツのローマ＝ゲルマン中央博物館、東ベルリンのD. D. R. 科学アカデミー、マルチン＝ホルター大学、コペンハーゲン大学、ケンブリッジ大学では、持参したスライドによって日本先史時代概説、飛鳥～平城宮概説を行い、欧文による紹介の必要性をうながされることもしばしばであった。

（佐原 眞）